



第 3 号

いせ志業尋

景観サポーター情報紙

平成23年度景観サポーター活動から

「伊勢崎城を古地図で歩く」：6月25日

「第1回伊勢崎市景観展」：10月4～7日

「先進地視察：新潟県南魚沼市雁木と歴史の町」：10月22日

「赤城山ビューポイントめぐり」&「境島村地区まちあるき」

&紙芝居「伊勢崎駅物語」発表：12月 3日

「平成23年度景観まちづくり講演会

講師：川端五兵衛「元近江八幡市長」・・・風景はみんなのもの・・・」

写真：上岡

平成24年1月31日

「いろいろなこと！やりました」

本年度の主な活動を紹介いたします。一人でも多くの読者の方が、ふる里「伊勢崎」の景観に興味を抱いてもらえるようガンバっています・・・みんなでいいところ探し、しませんか！！

「伊勢崎城を古地図で歩く」

町の歴史を知ることは人に例えると思い出話を聞くことに似ています。その人の人格が思い出の中で創られたように町の歴史を踏まえることは、その町を知ることであり町の将来を創造する上で重要なことです。

その考えに基づき故郷の「城」に目を向けることとしました。戦国時代伊勢崎には那波城(堀口町)、茂呂城(美茂呂町)、毒島城(赤堀今井町)など多くの城がありました。今回景観サポーター活動の一環として伊勢崎城(陣屋)の古図を基に城の遺構探しの町歩きを行いました。

伊勢崎古図(図1)は寛政十年(1798年)作製と記されています。江戸時代の三分之二ほどの徳川12代将軍家慶(いえよし)の時代でしょうか。伊勢崎藩主は酒井家が治めていました。

まち歩きはこの古図(1/600)をトレースし現代の地形図(1/1000)に重ね合わせ作製しました。重ね合わせの基準点は歴史あるお寺(中台寺と本光寺)を用いました。私もそうでしたが「城の遺構などすべてなくなってしまった。」と多くの市民が思っているでしょう。しかし今回重ね図面の精度を上げる事により当時のお堀の形態が現在の地形に色濃く残っている事が確認されたのです。有名などころでは北小学校北側の細くクランク状の道。伊勢崎駅から南に下がった杉原ビル南西にある緩やかなクランク、旧設楽外科医院西のL字路(搦手門への道)これらはいずれも「雁木」と呼ばれ敵の攻撃を妨げ更に横矢を射かける為の形態です。今回新たに確認できたものは堀の最東端部、延命寺からあかいし保育園あたりの堀遺構、郵便局本局の駐車場北側にある段差が大手門入口である事、三光町公園が堀の最南端、相川考古館周辺の町割りや細街路は当時のままであることなどです。しかし残念なことに足利銀行周辺は区画整理事業の為、堀の形態は失われてしまいました。



森村家住宅の式台(※1)は伊勢崎城から移築

今回の重ね図作製とそれによるまち歩きで今まで気づく事の無かった「今なお息づいている伊勢崎の歴史」を発見する事が出来ました。「見るところなど伊勢崎には何も無い」と色々な人が言うでしょうが日常の中に潜んでいるまちの歴史を見過ごしているだけなのでしょう。速度の速い乗り物に乗ると視野が狭くなるように戦後の復興期から今日まで余りにも時間優先と効率主義に染まり過ぎ、目の前にある大切な「まちの思い出」に気づく事が出来なくなってしまっていたのでしょうか。時にはゆっくり歩いてみませんか。同じ空間に昨日とは違った何かを見つける事が出来るに違いありません。また、今回の重ね図の手法は伊勢崎の他の城や他市のそれらにも活用できる事で今後の広がりを検討していきたいと考えています。

(佐藤よ)※1:式台は身分の高い人の公式の出入口の意

『伊勢崎市景観展』



伊勢崎市景観展の開催
 ■ 平成23年10月4日(火)~10月7日(金)まで伊勢崎市役所の市民ホール(東館1階)にて初めての景観展が開催されました。
 内容は、伊勢崎市の景観サポーターの取り組みの紹介や屋外広告物の指導、是正状況のパネル展示、市内の風景や行事の写真展示とビデオ放映による紹介コーナー、その他景観に関する各種パンフレットの配布等々、盛り沢山で市民ホールを一杯にする程の盛り上がりでした。



中でも、今回は赤城山のビューポイントの来場者アンケートの実施や景観サポーターが作成した「伊勢崎駅物語」という紙芝居の展示には大勢の皆さんの関心を集めました。

次回も、より一層内容の充実を図り私達の町「伊勢崎」を住みやすい町とする一助となれば幸いと考えています。

■ 景観サポーターとして

今回の景観展は伊勢崎市としては初めての開催でしたが、このような啓蒙活動を通じて私たち、市民ひとり一人が景観に対する意識を持って自分達の住んでいる町をより美しく、より住みやすい環境づくりを目指して、協力し合い実現していければ良いと思います。（秋山）



『先進地視察雪国の街・新潟県塩沢と渋川市白井宿』

＊ ＊ 雪国の街・塩沢の歴史を伝える「牧之通り」 ＊ ＊

平成 23 年 10 月 22 日、伊勢崎市景観サポーターの景観先進都市視察として、平成 23 年度「都市景観大賞」を受賞した「三国街道塩沢宿 牧之(ぼくし)通り」の街歩きに参加して参りました。参加者は私を含むサポーター 11 人と伊勢崎市職員 5 人の計 16 人です。

現地は牧之通り組合景観委員長・貝瀬久さんに案内していただきましたが、街歩きに先だって説明していただいた話が印象的で、特に、街づくりの基本コンセプト決定に当って意見を募った時「広い空だとか綺麗な山並みだとか、そんなのは全部ボツ。『塩沢らしさ』を出さなければダメ。それじゃ『塩沢らしさ』って何？」と皆で悩んだこと、その結果得たのが「雪国の街・塩沢の歴史」だったと言う経緯に、強く関心を持ちました。言い得て妙だったのが「ハウステンボスを作っても意味がない」と言う表現でした。



他に、事業費捻出過程や建物外観のデザインルール、住民への説得、非賛同者の対応など、美辞麗句で飾らないストレートな内容は、貝瀬さんの気さくな口調の中にも、街づくりに関与する人たちの厳しくて本質的な姿勢を感じました。



鈴木牧之は、塩沢を「雪国の街」としてアピールする時に最も重要な人物で明和 7 年(1770 年)塩沢村に生まれた偉人です。文人であり画人、俳人であり「北越雪譜」で雪国の生活を世に伝え、江戸で大評判になりました。

通りの景観整備に当って決めた重要な共通ルールは『沿道を民地側へ2mセットバックし、その場所に雁木の通路を設置する』こと。この雁木通路は通りの景観を縁取りのように整え、また降雪期には雪よけ歩道になり

ます。デザインルールとして、屋根は切妻、色は黒か焦げ茶系。外壁は白、茶色の土壁色。統一ルールを守りながらも、同一形状・同一色の建物が並ぶ訳ではなく、各店舗が工夫して個性を出し、統一と自由の共存を感じました。

区域内の郵便局や銀行などのサービス業種も街づくりに積極的に参画し、住民・行政・店舗や企業が共存共栄する事、これが街づくりの基本姿勢であると実感した光景です。大通りの中央部に向かって緩やかなスロープが付き、また平面的にも大きなカーブになっているので、どの場所からも大通り全体の見通しが利かず、その形状が「あの見えない辺りにも行ってみよう」と言う好奇心を引き出します。

以上、「三国街道塩沢宿・牧之通り」の街歩きレポートです。今回もたくさんの事を確認し学びました。「町屋造りと葛飾北斎」を生かした小布施町、「蔵と水運の歴史」を生かした栃木市、そして雪国の歴史を生かした「塩沢宿」。どの街も過去の歴史を見直し、「自分らしさ」を迫り及して蘇らせた事に共通点があります。過去の歴史を基盤にしたことから、建物や街並みは「和風」になり、今回もまた日本古来の「和」について考えさせられました。現在は全国津々浦々、無国籍の住宅地や商店街が広がり、和の風景は消えつつあります。材料の強度や耐火性などを工業製品に頼った結果、より軽く・安く・強く・機能性に優れた工業製品に置き換えられ、これらの観点で劣る昔ながらの木や竹、藁や麻、紙などの自然素材の出番が減りました。費用対効果を目的とした結果なので今更批判されるべきことでもありませんが、その姿勢によって失ったモノも少なからずあるようです。小布施や栃木を視察した時に感じたその想いを、今回の塩沢地区の視察で、また改めて感じた次第です。その失った「モノ」は単に風景や機能などの物理的なものだけで、日本人としての自信やアイデンティティの喪失ではなかったと信じたいものです。

(上岡)

『城下町の面影が漂う白井宿探訪記』

記憶を辿りながら、景観サポーターの先進地視察(平成23年10月22日実施)の印象を記します。午前「新潟県南魚沼市雁木と歴史の町」の視察。地域興しの原点が、鈴木牧之著「北越雪譜」に代表される雪国文化にあると実感。「そっと置くものに音あり夜の雪」(牧之)と記された小さな句碑が、牧之の精神を伝えているようです。午後は「『道の駅こもち』と白井宿」の視察。道の駅が現代なら、白井宿は歴史上の道の駅との印象を受けました。

到着時は小雨混じりの天気、バスの中で白井宿観交(光)案内人の会、金内様に地域発信への熱意のこもった説明を聞いてから視察に出ました。ちなみに白井は「しろい」と読むそうです。下車して早速、道の駅はなぜ作ったのですかと愚問を發したところ「国土交通省が国道沿いにトイレを設置したい。」と言ったのが発端と説明してくれました。白井宿は、上州と越後をつなぐ要衝に位置



し鎌倉時代中期に、関東管領上杉氏の配下にあった長尾氏が築いた白井城(元和9年・1623年に廃城)の城下町で、廃城後も通商で栄え今日に到ります。前方を視界から隠す防衛策の雁木折道路構造も残り、中世の都市計画に思いを馳せました。白井宿の見所は井戸と堀。「羅漢水」と刻まれた石塔は、地下水が出にくい地形での井戸開削には経済力と地域共同体の結束と優れた指導者が必要だと伝えるモニュメントです。完成途上だが、昔栄えた頃を復元しようとする修景も参考になりました。堀の端に、梅から改植されたという桜が大きく育っており、こんな所にも時代の流れを感じました。



道の駅はモータリゼーションの空白地帯を支える24時間対応の休憩所、前線基地兼地域情報センターです。過疎化が進む中山間地の

の活性化には不可欠な施設でもあり「道の駅こもち」は平成12年8月登録、現在その利用者は76万人、推定来場者は200万人/(年間)に達しているとのこと。子持村は平成18年の大合併で消えたが、マンホールの蓋に刻まれた子持村、白井宿という字句に、当時1万2千名弱の小村が地域興しにかけた心意気を感じます。道の駅を見学するゆとりは無かったが、白井宿という歴史的資産が道の駅という現代の地域施設とうまく補完しあっているという印象を受けました。(重田)



「赤城山ビューポイントめぐり」&「境島村地区まちあるき」
&紙芝居「伊勢崎駅物語」発表



＊ ＊ 『赤城山ビューポイントめぐり』 ＊ ＊

平成23年12月3日、景観サポーター実行委員会として、伊勢崎市内から眺める赤城山のビュースポット巡りを行いました。あいにくの雨で赤城山は全く姿を見せてくれませんでした。日頃、赤城山のビューポイントを探す時に気にかけている事柄を整理してみました。

■ 始めに ■ 赤城山を眺める事ができる群馬県や近県各地の人々は、その誰しもが「我が赤城山が一番美しい」と言います。伊勢崎市民もその例外ではなく、「長いすそ野が両側に広がり、荒山の尖った三角形のピークを中央に配し、左右ほぼシンメトリーの形状で優しくたおやかな雰囲気がある。」と言ったところがその理由のようです。「美しさ」は主観に依存する要素が大きく絶対的美しさを競うことは無意味なことですが、前橋や桐生、渋川や沼田からの赤城山が不整形ながら立体的であるのに比べ、伊勢崎市からの赤城山は前面の各ピークが横並びで整然とした美しさがある半面、立体感に欠けます。立体感の乏しさを他の「何か」で補うと、その配慮が時には赤城山を脇役に追いやりますが、その場合においても、その風景は伊勢崎市からのものであることを証明する名脇役です。以下に、このような観点での赤城山やその脇役達をまとめました。

■ 河川と赤城山 ■ 河川を配する時に、堤防を利用して遠近感を際立たせると、赤城山の平面的な形を補い、更に、蛇行した河川は風景を柔らかくしてくれます。広瀬川や粕川、早川はやや南北に流れ、この観点で赤城山との構図を考える時にたくさんのビューポイントを与えてくれます。



粕川と赤城山(五目牛町)

■ 草木や花々と赤城山 ■

四季折々の草花は、それを単独に撮っても伊勢崎市で咲く草花である証



蕎麦の花と赤城山(波志江町)

明はできませんが、赤城山を遠景に配する事により「ここ伊勢崎で咲く花」を証明できます。名峰赤城山を贅沢な脇役として登用するケースです。花は市内各所で容易に見つけられますが、ダイナミックな絵柄になるのは南北に向いた通りのイチヨウや楓の街路樹です。

■ 橋と赤城山 ■ 気の向くままに赤城山ビューポイントを探すと、無意識に人工物を排しています。その中で橋、特に吊り構造である斜張橋はその繊細なケーブルと力強いタワーの形状が機能美を与え、モニュメントとしての役

割も果たし、伊勢崎市内の3つの斜張橋と赤城山は「自然と構造物」の組み合わせでありながら上品に調和しています。また現在の上武大橋は昭和初期に造られた多連鋼製トラス橋で形式の古さのため、重厚感とレトロ感が味わい深く、それと利根川、遠景に赤城山を配すれば大自然と歴史的巨大構造物が調和した視点を与えてくれます。

■ 終わりに ■ 以上、赤城山のビューポイント探しで日頃気にかけている事柄です。まだまだ言葉足らずです。「美しさ」は主観に依存し、百人百様の「美しさ」が存在するものと思いますので、皆さんも「私の赤城山」探しをしてみてください。なお、補足ながら、私の赤城山探しはほぼ例外なくサイクリングで行っています。車は細かい移動には不便で、納得できる構図や角度を探すためには、赤城山を横目に、ゆっくりとペダルを踏みながらの移動が最適です。
(上岡)



** 紙芝居「伊勢崎駅物語」**

この紙芝居は平成23年初秋に完成し、初演は12月3日の景観サポーター会議で行われました。

対象年齢は小学生の高学年以上向けを対象に制作しました。そこで赤石君とひまわりちゃんの会話形式で進行させています。

江戸時代も終わりの頃、黒船来航事件後米国と貿易の為使節団を派遣。派遣先で蒸気機関車を見てビックリ仰天。そこから話が始まります。明治5年西洋の文化を沢山取り入れて、まず新橋横浜間を英国製蒸気機関車を走らせました。当時は陸蒸気(おかじょうき)と呼んでいました。栃木県小山市と前橋市では両毛線敷設計画が進んでいました。その案では伊勢崎駅

が街中から大きく離れた赤堀の大字野或いは華蔵寺公園付近となっていました。「これでは街に遠く町の発展につながらない。」そこで当時の武孫平町長や伊勢崎織物組合の人達が東奔西走しやっと現在の位置に造られることになったのです。明治22年伊勢崎駅が開業すると(両毛線全線開通は23年)、43年には東武伊勢崎線も開通、東京や関西から多くの商人が集まり駅前は大賑わいしました。「銘仙織りだす伊勢崎市」は伊勢崎の駅前を表す言葉そのものだったのです。昭和9年にはモダンな昭和駅舎が出来上がり利用客も順調に増加しました。12年に日中戦争が始まり成人男子が兵隊に招集され毎日「バンザーイ！バンザーイ！」と歓呼の声が駅じゅうに木霊しました。しかし、その陰で戦死した兵士を迎える「英霊迎え」に涙する多くの人々がいたのです。18年には軍需産業最優先となり駅も街も様変わりしました。勤労働員の会社員や学生で通勤時は大混雑です。切符も販売制限となり不便な毎日となりました。

20年8月の終戦前夜B29の爆撃で市街地の3分の1が焦土となりました。駅舎は奇跡的に焼失を免れましたが伊勢崎織物組合や女子高等学校、小学校等の多くが灰になり伊勢崎の街は一夜にして焼け野原となったのです。失明や手足を失った多くの復員兵が駅をはじめ街の至る所で見受けられました。

やがて復興期を迎えバス路線も復活し高崎、前橋、太田或いは四万温泉など行き来するバスターミナルとして活況をあげました。しかしマイカー時代到来と共に姿を消していくのです。伊勢崎駅は時代の移り変わりを敏感に映し出していたのです。新しい伊勢崎駅の北口が開業し南口も後わずかで完成となります。様々な話題を載せて縦と横を織り出す銘仙のように様々な絆を演出してくれた駅物語を終わります。幸いにも本作品(パワーポイント版)は平成23年度群馬県自作視聴覚ソフトコンクールで優秀賞を受賞しました。
(星野)

** 境島村地区まちあるき**

平成23年12月3日、景観サポーター会議として、伊勢崎市境島村地区の『まちあるき』が行わ



れました。午前中の赤城山ビューポイントめぐりに続き、バスは島村蚕のふるさと公園に到着、島村地区の歴史性を生かした地域づくりに熱心に取り組んでいる「ぐんま島村蚕種の会」の栗原様の案内で田島弥平旧宅を中心に廻りました。

■田島弥平旧宅の価値■群馬県が取り組む世界遺産候補である「富岡製糸場と絹産業遺産群」の4つの構成遺産の一つとして位置づけられている田島弥平旧宅は、日本の明治期の近代化を支え、蚕種養蚕業の礎をつくり、群馬の明治期の近代養蚕農家の原型としての役割を果たすなど、その歴史的な価値は極めて高く、伊勢崎市だけでなく群馬県にとって、また日本にとっても貴重な歴史資産です。



■島村の景観特性■群馬県での養蚕農家と言えば「櫓（やぐら）」と多くの方がイメージしますが、その原型が田島弥平旧宅であり、その形式は島村の他の多くの養蚕農家の建物に波及し、合わせて高い2階の階高や、あたかも蚕種生産工場のような面積の大きい建物群は、県内では他に類を見ない、重厚で威風堂々とした島村独特の農村景観を創出し、地区の歴史性と一体となった景観は、まさに当地区のアイデンティティそのものでした。『まちあるき』では、島村蚕のふるさと公園→利根川堤防右岸より地区を望遠→島村蚕種製造所跡→田島弥平旧宅を中心とした大型養蚕農家群→石積みの小道→金井烏洲家墓→島村沿革碑→島小学校と巡り、養蚕農家群、かしぐねと石積み、ネギ等の広大な畑、利根川の美しい緑の土手の水平線、遠景と



しての山々等が一体となって、島村らしい景観を構成していることを実感することができました。

■世界遺産登録から地域づくりへ■櫓のある大きな養蚕農家は、その維持保全に大変な労力と費用が必要と思われます。世界遺産への登録運動を通し、それらに対する評価を高め支援策を講じようという機運をつくり、地域の方々の愛着と誇りの種としての活用を図り、地域づくりの資源として生かすことがこれから更に求められて来ると考えられます。同じ伊勢崎市民として、その価値や魅力を伝え、島村らしい景観を生かした地域づくりに、できることから関わるのが大切な景観サポーターの役割であると強く思いました。（栗原）

「平成23年度景観まちづくり講演会

講師：川端五兵衛・風景はみんなのもの。」

講演：川端五兵衛・『風景はみんなのもの』

平成24年1月31日、伊勢崎市境総合文化センター小ホールにて、第1回景観街づくり賞表彰式と講演会が実施されました。講演会は、「風景はみんなのもの～死に甲斐のある終の栖ついで すみか

のまちづくり～」というテーマで、講演者は、元滋賀県近江八幡市長の川端五兵衛氏でした。



川端氏の講演は、実践者のみが語れる説得力のある内容でした。市長時代に国際標準機構(ISO)の規格認証など、行政における革新的な試みで全国的に有名な方ですが、今回の講演は川端氏の信念である「文化的視点のまちづくり」という内容でした。

以下、その内容です。

■ 圧倒的な行動力・・・川端氏の生まれ育った近江八幡は、近江商人発祥の地で、豊臣秀吉の甥、秀次が築つたお堀と伝統的な商家の家並みが残る街でした。しかし、そのお堀(八幡堀)も、高度成長時代には、へドロのドブ川に成り果ててしまっていました。

堀の真ん中にコンクリートブロックで埋め立てて水路を作るため、昭和47年からスタートしていた公共事業を、川端氏と仲間は無謀と思われる行動力で市、県、国に働きかけ中止させ、お堀として浄化、再生したのでした。一旦、スタートした公共事業を覆すのは、困難なことと聞いていますが、川端氏は圧倒的な行動力で、それを成し遂げたのでした。

■ 未来志向の景観保存・・・川端氏は、八幡堀の浄化・再生の他、その堀周辺の伝統的な商家の保存、水郷の水辺環境の保存などの活動を行ってきました。それは、過去を懐かしむノスタルジーでなく、自分たちのアイデンティティの源泉である風景を子孫へ引き継いでいかなければならないという未来志向の景観保存なのだと言っていました。

川端氏の講演は、実践に基づくもので、その成果(八幡堀の再生など)は我々も知っているので説得力のあるものでした。そして、川端氏が講演の最後で参加者に復唱をお願いした「I LOVE ISESAKI」は私たちのこれからの景観まちづくり行動の源泉・活力になる言葉だと思いました。

(角田)



編集後記

暗中模索で続けてきた景観サポーター活動も4年目を迎え、おぼろげながら進むべき道が見えてきたように感じています。それは毎年の講演会、先進地視察、まち巡りなどを行いそこで出逢った多くの方々、講演で気づかされた多くの事によるものと感じています。また逆に知れば知るほど奥深いその世界に自分の無力さを痛感している次第です。本紙「いせさき美尋」もやっと第3号を発行する運びとなり1年間の総決算ができ、ささやかな満足を得ています。来年度はより現実的な活動が行えるよう皆と力を合わせ活動していこうと考えています。より多くの市民の方々の理解と協力をお願いします。(佐藤よ)

景観サポーター情報紙「いせさき美尋」とは？

美尋の「美」→多方面から考察した美しいもの。「尋」→素晴らしい景観を尋ね求める。対象物の本質の探究。景観サポーターは、伊勢崎の自然、歴史、地域文化、先進性等景観の大切さ・素晴らしさ・美しさを多方面から尋ね(美尋)、景観の価値を学び・発見すべく研鑽を重ね、その発表の場を「いせさき美尋」と名付けました。

発行/いせさき景観サポーター編集部

びじん

『いせさき美尋』景観サポーター情報紙第3号

平成24年3月10日発行 連絡先/090-1252-2509(佐藤)